

神奈川

鉄道3線が乗り入れる神奈川県内屈指の交通の要衝・海老名駅周辺が、再開発事業によって10年後に大変貌しそうだ。JR相模線の同駅西口には2015年10月、駅直結型の大規模商業施設「三井ショッピングパーク ららぽーと海老名」が開業。JR相模線と小田急小田原線との間に広がる同駅の「駅間地区」でも、16年から小田急電鉄によるマンションやオフィスビルの建設計画がスタートする。

海老名駅に乗り入れる鉄道は、JR相模線、小田急小田原線、相模鉄道本線の3線。小田急と相模鉄道の駅ホームは隣り合い、JRとの間は「ららぽーと」開業に合わせて完成した連絡デッキ（動く歩道）で結ばれ、徒歩3～4分の至近距離にある。また、近年は圏央道（さがみ縦貫道路）の開通により、車での利便性も格段に向上している。

しかし、これまでは小田急小田原線で2駅先の本厚木駅周辺が商業やビジネスの中心地だったため、小田急海老名駅東口に大型商業施設「ピナウォーク」（02年開業）や駅直結の複合商業施設「ピナフロント」（14年開業）があるぐらいだった。両施設の事業主体はいずれも小田急電鉄で、新たな事業主体の参入が待たれていた。

この発展可能性に目を付けたのが、「ららぽーと」（全国各地）や「ラゾーナ」（川崎）、「ダイバーシティ」（東京）などのリージョナル型ショッピングセンターを展開する三井不動産。JR相模線の海老名駅西口土地区画整理事業に食い込み、敷地面積約3万3,000平方メートル、鉄骨造り4階建て、延べ床面積約12万1,000平方メートル、店舗面積約5万4,000平方メートルの「ららぽーと海老名」を建設した。

「ららぽーと」として全国10番目となる海老名の特徴は「都市型のショッピングスタイルとコミュニティーを兼ね備えた駅直結型の商業施設」。衣食住に関わる^①旬、の263店舗を導入するとともに、3、4階の中心部に空間デザインとショップ、イベントを複合的に組み合わせたセントラルゾーン「EBICEN（エビセン）」を設けた。気軽に参加できるワーク



JR相模線の海老名駅西口に開業した「ららぽーと海老名」。手前に停車しているのは相模線車両

海老名駅周辺が10年後に 大変貌

ショップなどを随時開催し、知的好奇心を刺激する出会いや交流により新たなコミュニティーを創出するという。

受けて立つ小田急電鉄は「長期ビジョン2020」やグループ中期経営計画などで同駅を「沿線中核駅」と位置付け、駅間地区の再開発計画を15年8月に発表した。社有地（約3万5,000平方メートル）を住宅エリアと賑わい創出エリアに分け、高層分譲マンション、サービス付き高齢者向け住宅、オフィスビル、既存の業態と差別化した商業施設、フィットネスクラブなどを建設する。

再開発の都市デザインコンセプトは「段丘都市」。エビが「階段状の地形」を意味する地名の語源とされることから、海老名の地形的な特徴を踏まえてコンセプトとした。海老名市内でも都市化の進展で失われつつある段丘を人工のデッキで再現し、歩行者と車を分離して安心・安全な街をつくるという。竣工予定は25年度。

小田急電鉄は16年3月のダイヤ改正で、特急ロマンスカーを海老名駅に停車させることを決定。また、相模鉄道も18年度中にJRと、19年4月に東急東横線と相互直通運転を開始する予定で、同駅の利便性は飛躍的に増す。かつて「へそのない街」と言われた海老名市は、同駅を中心に今後10年ほどの間に飛躍的な発展を遂げそうだ。